

# アフリカの学力調査からわかること

佐々木真千子



私は、アフリカ地域で行われている学力調査の研究  
をしています。<sup>注</sup>なぜアフリカなのかといいますと、

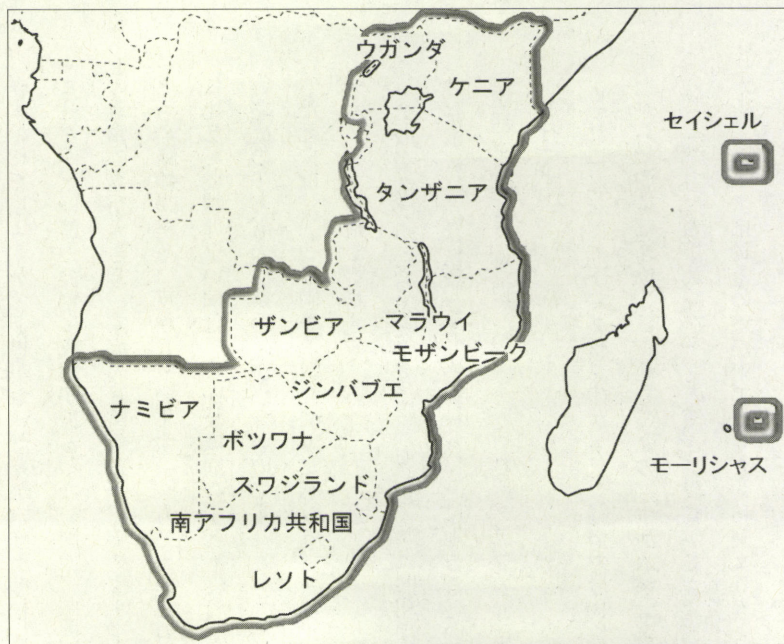
二〇〇〇（平成12）年に国連で「二〇一五年までに貧  
困をなくしましょう」という目標が設定され、日本も  
援助を行っています。最も貧しい地域であるアフリ  
カについては、子どもたちの学校生活があまり具体  
的に知られていないといわれているからです。研究者が  
学校や教室に入れてもらうのは大変難しいのです。

ところが、現地で行われている国際学力調査を見ま

すと、いろいろな質問項目に対する回答結果の数字の  
中に、質的に解釈のできる豊かな資料があることに気  
づきました。資料をていねいに解析することで、アフ  
リカの小学生の日常生活や教育成果の一つである学力  
が、どのような大人の働きかけや環境によって異なる  
かが見えてくるのです。また、これはアフリカの事情  
と限定するのではなく、海外の事情を知ることにより、  
そこから日本の私たち自身の姿を振り返ってみること  
ができるかもしれません。

まず調査の対象国を紹介しますと、アフリカ大陸の南東部、北はケニアから南端の南アフリカ共和国までの14か国です（下図参照）。一日一人当たりの国民所得は、中所得国セーシエルの19・5ドルから、0・40ドルのマラウイまで50倍近い開きがあります。これは近隣にありながら大きな差のように見えますが、もしアジアで同じような調査をしたとすれば、一日一人当たりの国民所得が100ドル近い日本のような高所得国から、やはり一日1ドル前後の国までであるという結果になります。それから見れば、50倍近い開きも驚くほどの大きな差ではないといえるのではないのでしょうか。

一日20ドル近い国では、ほぼ全部の家庭に電気が通り、テレビも九割がたの家庭にある一方で、一日1ドル前後の国では、大まかにいって、電気の通っている家庭が一〜二割、水道が





二割程度、屋根に雨を防ぐシートのある家庭は少なく、光源はろうそくやランプという生活です。なぜ国によって経済力が違うのかというのは大変興味深い点ですが、この地域では、工業をはじめとする付加価値の高い産業が発達している国よりは、概して鉱物・水産・観光などの資源をもち、政治の安定した国の経済力が高くなっています。

では、国の経済力が高ければ、子どもの学力は高いのでしょうか。ここが興味深いところですが、普通に考えれば、国の経済力が高く、設備が整い、家庭も豊かで教育にお金を多く使うことができれば、それだけ成績はよくなるのではないのでしょうか？そこで分析を行ってみると、意外なことがわかります。経済力が7位、10位、13位の国が成績ではそれぞれ2位、3位、7位と躍進している一方で、経済力が3位、5位の国が成績では8位、12位と後退しているのです。これは

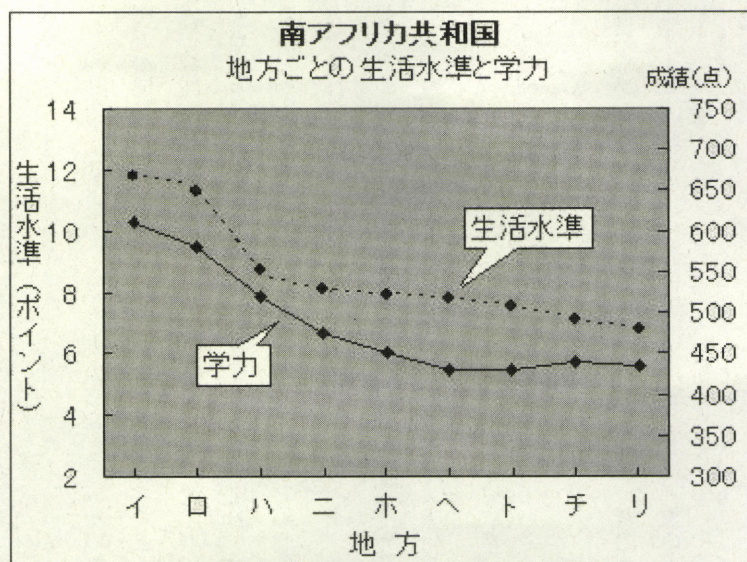
一体なぜでしょうか。予想がついた方がいるかもしれませんが、経済力の割に成績が振るわない国は、国内の貧富の差が大きく、家庭の経済格差が、そのまま子どもの成績の格差に反映しています。一方で、経済力に比して成績のよい国は、豊かな家庭の子どもと貧しい家庭の子どもの成績の差が小さいのです。

たとえば、二つの国を比較してみましょう。次ページのグラフを見てください。

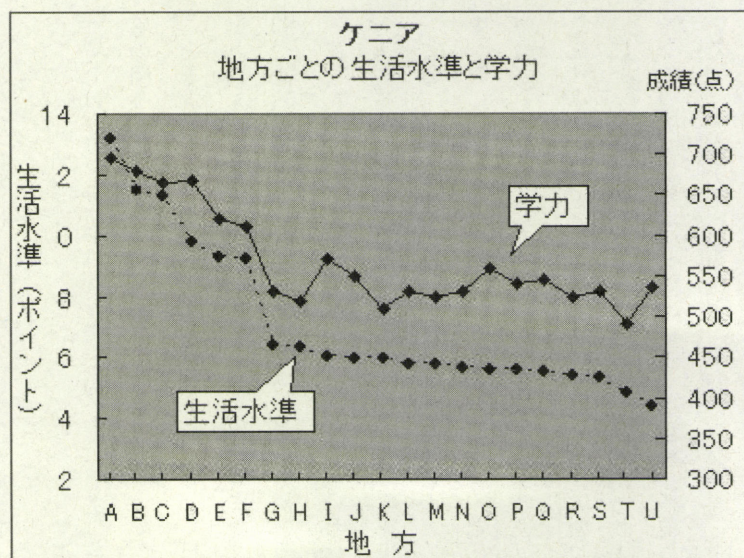
上のグラフからわかるように、南アフリカ共和国（経済力は3位に比して、成績は8位）は地方ごとの「生活水準」と「学力」の二本の折れ線グラフの傾きが並行です。

それに対して、下のグラフのケニア（経済力は10位ながら、成績は2位）は、地方ごとの「生活水準」よりも「学力」の折れ線グラフの傾きが緩やかです。しかも、ケニアは貧富の差が南アフリカ共和国よりも大きいのです。





SACMEQ データより作成



SACMEQ データより作成



では、このように貧富の差があるにもかかわらず、成績の差が小さい国があるのは一体なぜでしょうか。

この理由を探るために、子どもの成績と、ほかの要因との関係を細かく見ていくことにしました。たとえば、教師の特徴（成績、学歴、年齢、経歴、教え方、人数など）、教師が使用できる教材の種類（地図、辞書など）、学校の設備（図書館、テープレコーダーなどの機材やトイレの数など）、文房具（ノート、鉛筆、教科書など）、生徒の家庭の生活環境（本、電化製品、電気、水、家の素材、食事の回数、家で公用語を話すかなど）、行政の支援（視察官やアドバイザーの訪問頻度と内容など）と成績の関係を調べていきます。しかし、どれも満足のいく関係を示しません。教師の成績がよくても子どもたちの成績はむしろ低い場合があります。教材や学校の設備、文房具などは、無いよりはあったほうがよいのですが、無くても成績のよい国はあります。電化製品はおろか、電気・水道が無く

ても成績のよい国はあります。では、何が成績をよくしているのでしょうか。

それは、私の分析では、「家庭の関心」でした。「家庭の関心」というのは、子どもに、学校でやってきたことを聞いたり、習ったことを生活の中で使ってほしいと頼んだりすることです。どんなに教材が豊富でも、電気が普及していても、公用語である英語を話す家庭であってさえ、教育への「関心」が低ければ子どもの成績は伸びていません。

では、この「家庭の関心」はどこからくるかという点、実は親の学歴と関係があります。こう書くと、学歴の高い親の子どもは学歴が高くなるという再生産になると思われるかもしれません。ところが、学歴が高いほど「家庭の関心」が高いというわけではありません。このアフリカ地域では、親が「小学校を卒業していること」が小学校中退以下の学歴のみならず、中学校進学以上の学歴の親よりも「家庭の関心」が高いこ



とがわかりました。小学校を卒業していれば、基本的な読み書きそろばんができます。しかしそれでいて、何らかの事情（経済や内戦など）でそれ以上の上級校には進学できなかつたのかもしれない。親自身がないなかつた希望や願望が子どもの教育への関心につながっている可能性があると思われれます。また経済社会環境も影響します。ケニアなどに関する別の研究では、国を挙げて学歴重視の風潮があるといえます。

……かつて日本も経済成長に懸命だった時には、そのような雰囲気があつたのではないでしょう。その善し悪しは別として、教育と将来の国の姿とを関連づけない人はいないでしょう。

私たちは貧しい国には、まず物資を送ることを考えます。教科書やノートや鉛筆などを充足させてあげたいと思います。しかし、子どもの勉強を伸ばすのは、物質ではないようです。「家庭の関心」がキーポイントなのです。むしろ「家庭の関心」を高めることは容

易ではありません。教育現場の方は、それができれば苦労はない、とおっしゃるかもしれません。しかしそれでも、小学校を卒業した子どもは、次の世代の自分の子どもも小学校に行かせようと考えているのです。従って、私たちはまず、いま小学校に通っている子どもが卒業できるようにサポートすることが重要でしょう。そして、国際教育援助は世代を超えた長いスパンで行うことが必要だと思われれます。

国際学力調査は、教育はすぐに結果が出ないということも示しているようですが、このような途上国も含めたほかの国との比較は、自国の政策について考える上にも有効ではないでしょうか。

（お茶の水女子大学大学院博士課程前期終了）

注 本稿の詳細については左記を参照されたい。

[www.sacneq.org/downloads/theses/Machiko\\_Sasaki\\_Thesis.pdf](http://www.sacneq.org/downloads/theses/Machiko_Sasaki_Thesis.pdf)